

勇は歌が苦手なのだ。

もうすぐ合唱祭がある。それは卒業する六年生を送り出すもので、卒業式の前日に毎年行われている。

小さいうちはみんな同じメロディを歌っていればよかった。それなのに、五年生にもなるとパートに分かれてしまうから、いやなのだった。

運動会では体育の、合唱祭では音楽の、どれも何かしら得意な子が活躍できる時がある。だけど勇には得意なものがない。図工も苦手だし、勉強だってできない。

自分では歌がどんなふうにも外れているのかわからないけど、みんなはヘンだと言う。笑う子もいる。先生がピアノの鍵盤をひとつひとつ押しながら音をたしかめてくれるときは音が出る。でも、つなげて歌うとなるとずれてしまう。みんなとあわせなくちゃいけないのに、それができなくていらいらしてしまう。

踏みつけながら、勇は口をゆがめる。雪が真っ黒になると、きよろきよろと見渡して次の目標をさがす。もうめぼしい塊は残っていない。道の向こうに川が見える。となり町にはまだきれいな雪がありそうだけど、さすがに杏橋をこえるのは、ためらってしまう。

勇はどうしようか悩んだ。家に帰るにしても、母さんが仕事に出るのは午後だから、まだ戻るわけにいかない。どこか隠れるようなところはなしと悩んでいるうちに、ぐ

るっと回って、けっきょくいつもの通学路に出てしまった。学校に近づくと、歌声が聞こえてきた。一年生か二年生の歌だ。勇は気づかず指でリズムをとった。そして合わせるように歩き、やがて正門にたどりついた。

授業中の教室には入りにくい。どうしようと考えて、勇は階段をのぼらずに、保健室のあるほうへ廊下を歩いた。

壁の掲示板には合唱祭のポスターがはってある。手描きで二年生と四年生がつくったものだ。演目を書いてあって、勇たちの歌う「飛行船」も書いてあった。

保健室の扉は開いていた。そっと中をのぞきこむと、たまたまこちらを見ていたのか、待ちかまえていたのか、白衣の福田先生と目があつた。

「おはよう」

「おはようございます」

気おされるように、勇は小さくあいさつを返した。入っ正しいよと言うので、そっと中にすすむと、食卓のようなテーブルで男子がひとり、分厚い本を読んでいた。

「ここにすわって。君は初めてくるね。えっと——」先生は名札をちらっと見て「五年二組の戸川勇くん」

福田先生は自分の机のうえにあったファイルに勇の名前を書き、それからテーブルのあいだにいるところを指さした。「今、何の時間？ そう、算数。じゃあ、教科書開いて、